



Vol.10

発行 2011年8月
動物愛護ボランティア
《ねこの会》

事務局：TEL/FAX 0263-36-2192

大災害

岡田 英二

過日、3月11日の大震災の時、つくばは震源地に近かったため大変な被害でした。私は勤務中で研究室のパソコンに向かっていました。緊急時のエリアメールと同時に足下から唸るような地鳴りが瞬時に大きく揺れ出し、身構える時間は無かったように思います。データを保存する暇も無く、机の上の物は飛散し、棚の書物は雪崩のように落ちてきました。高価なモニターが落ちるのを支えようと同僚が数m先へ席を立ったとき、その椅子の上に重戸棚が2つも倒れ込み、その場を移動した事が無事に繋がりました。人間の運命の強さを感じると同時に、為す術もない人間の無力さも痛感しました。

研究所内の状況と職員の無事を確認するなど、皆が大騒ぎで緊急作業に走り回る事態になりました。ふと、自宅のことが頭をよぎりましたが、今直面している事が優先になり、留守宅の猫たちの所に戻ることは出来ませんでした。余震が絶え間無く、揺れ続く建物の中には入れませんが、危険回避のための作業と安全を確認しながらの貴重品の搬出などを済ませ、ようやく一段落を迎えたのは夕方でした。

大慌てで自宅に戻ると、食器が割れて部屋中に物が散乱して大変な状態でした。いつも出迎えに来る猫どもは見あたりません。地震の揺れでガラス窓が割れて「外に出たのでは」と案じましたが、幸いにも名前を呼ぶとベッドの下から這い出てきました。耳の良い猫どもは余震のわずかな地鳴りにも敏感に反応し、小刻みな揺れでもベッドの下に潜り込んでしまいます。あの大地震の恐怖を体験し、飼い主不在の時はこうして自分で考えて身を守っているのだと頼もしく思えました。

昨今のゆとりある社会では、行政でも災害時のペットの扱いを考えるようになり、数年前から避難所でのペットの扱いも文章で出回るようになりました。こうして実際に体験すると、室内飼いの猫では連れ出して同行さ

せるよりも、自宅が崩壊や水没などの問題がなければ置いたままの方が、安全な居場所も自ら確保するのでこれが一番だと思いました。ましてや屋外に自由に暮らす猫は問題無いと思いました。猫たちは、ご婦人たちが大騒ぎする姿と比較にならないほど冷静で、まさに研ぎ澄まされた野生の本能を発揮して身を守ることが出来ます。ソファでごろごろ寝そべっている次の瞬間、惨事でも敏速に野生児になれる猫たちには本当に感動しました。

その日の夜に同僚一家が私の部屋に避難してきました。高層の立派な建物も配管が歪み、停電と断水で小さな子どもを抱えての生活が出来ないと言います。猫どもは飼い主以外の人に怯えて、地震の時と同じでベッドの下に潜り込んでしまいました。トイレや水分を摂らないため別の部屋に置いてある二段ケージに入れて布で覆って安心させました。日頃、他者が来る時はケージを使います。業者が玄関の扉を開けたままで作業をする時、心配になるのでケージが役に立ちます。寝箱やトイレを設置したまま、いつも扉を開けて気ままに使わせていたので、自分の臭いがする安心な場所に待避した感覚だったと思います。

今回のような災害は津波を伴い、人間さえ避難先でも助からなかったケースがありました。繋がれた犬では、そのまま飼い主が避難してしまったのでは見殺しと同じで、「せめて鎖だけでも外せ!」と言いたかったです。このように災害時の対策には難しさが露見しました。人間に忠実で嫉みのできる犬に比べ、猫を避難に同行させるのは難しいでしょう。やはり、まずは自宅に置いて行く。その後、安全な小スペースを確保できる時は、日頃からケージトレーニングさえしておけば屋外でも物置でも避難場所の廊下でもケージに入れれば飼育できると思います。大勢の知らない人がいる、知らない場所に連れて行くことは難しい猫ですが、狭くても慣れたケージの中の方が猫にとっては、まだましで安心なのです。